

道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和2年度 第2号 2020年11月25日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

令和2年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（2次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」および釧路水試「北辰丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2020年11月11～16日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～600mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、前年同期を上回った。
- ・ 魚群反応の比較的強い海域は南茅部～鹿部沖と登別沖。
- ・ スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深350～500mにかけて強くみられた。
- ・ 水温は、渡島沖、胆振沖ともに平年よりもやや高い。
- ・ トロールにより漁獲されたスケトウダラのサイズは、体長（尾叉長）35～55cm（主体は40cm前後）。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも渡島沖の188、192漁区および胆振沖の184漁区に強い反応がありました（図1・2）。
2. 渡島から胆振にかけての平均反応量は、前年同期を上回り、2015～2017年とほぼ同程度となっていました（図3）。
3. スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深350～500mに観察されました（図4）。とくに、渡島沖では水深400～450mに、胆振沖では水深450～500m付近に比較的強い反応がみられました。なお、登別沖（Hライン）では海底から離れた（50～100m浮いた）深度に反応がみられました（図2）。
4. トロールによる漁獲物調査で漁獲されたスケトウダラは、渡島沖（Dライン付近）の水深430mでは尾叉長35～50cm、胆振沖（Gライン付近）の水深430mで尾叉長35～55cmとなっており、両地点ともに尾叉長40cm前後が漁獲物の主体となっていました（図5）。生物測定を行った結果、尾叉長40cm以上はほとんど成魚でしたが、40cm未満では未成魚も混じっていました。
5. 調査海域の水温は、渡島沖（Dライン沖）、胆振沖（Hライン沖）ともに、平年（2002～2019年度のこの調査における平均値）よりもやや高く、とくに、渡島沖の水深100～250m、胆振沖の水深100～300m付近にかけては、平年を1～2℃程度上回っていました（図6）。ただし、気象庁のホームページ（http://www.data.jma.go.jp/gmd/kaiyou/data/db/kaikyo/jun/t100_HQ.html）によると、2019年11月中旬には襟裳岬沖の深度200mに平年値を5℃程度上回る10℃以上の水塊がみられていましたが、今年度ではほぼ平年値並みになっていたことから、今後さらに水温が下がってくれば、スケトウダラ成魚の移動に適した状況になるものと考えられます。

なお、次回の調査は年明け後の1月中旬（2021年1月13～21日）を予定しています。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

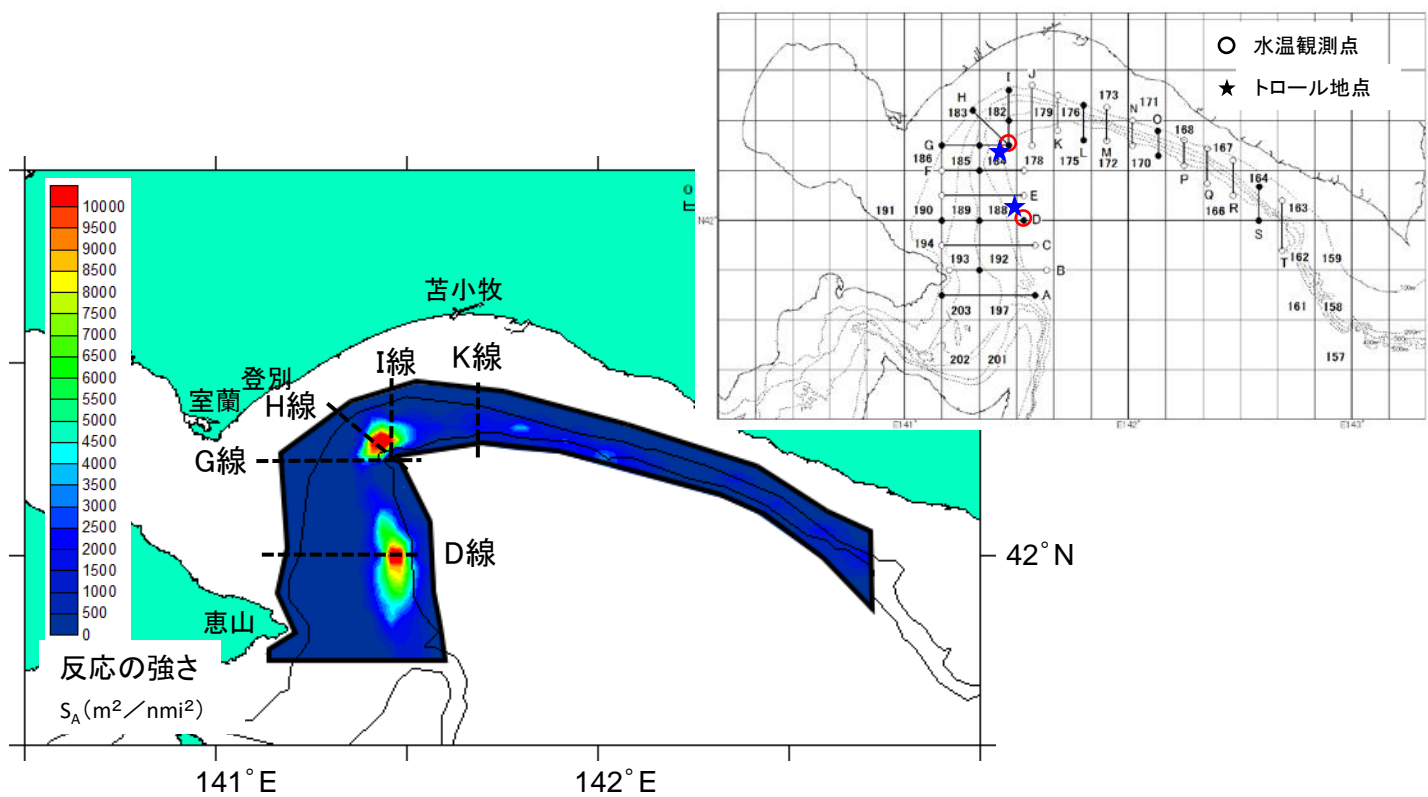


図1 調査海域における魚群の分布(右上図は調査海域図)

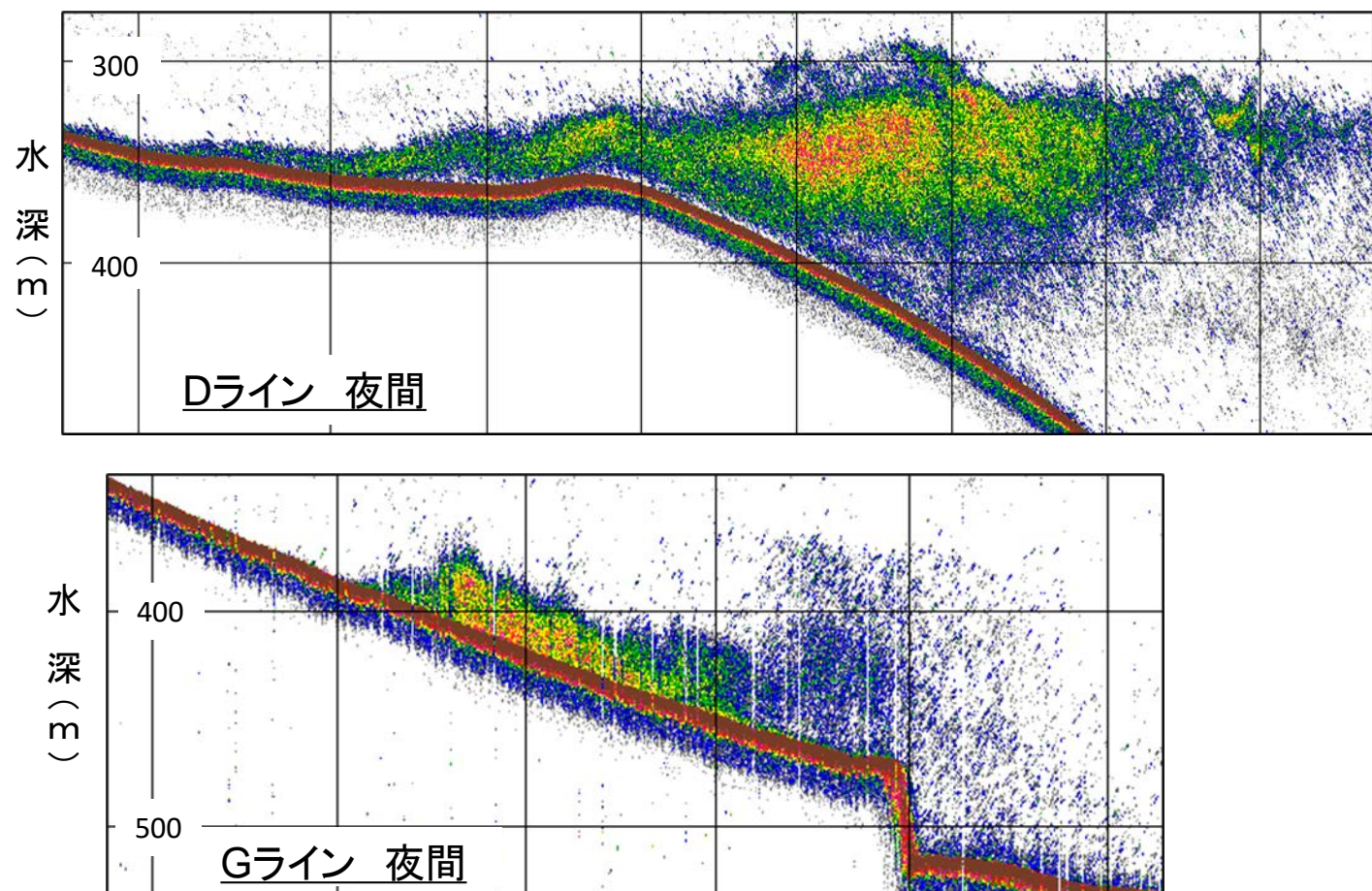


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

なお、水平ラインの間隔が異なるラインがあるのは、調査船の船速を変更したため。

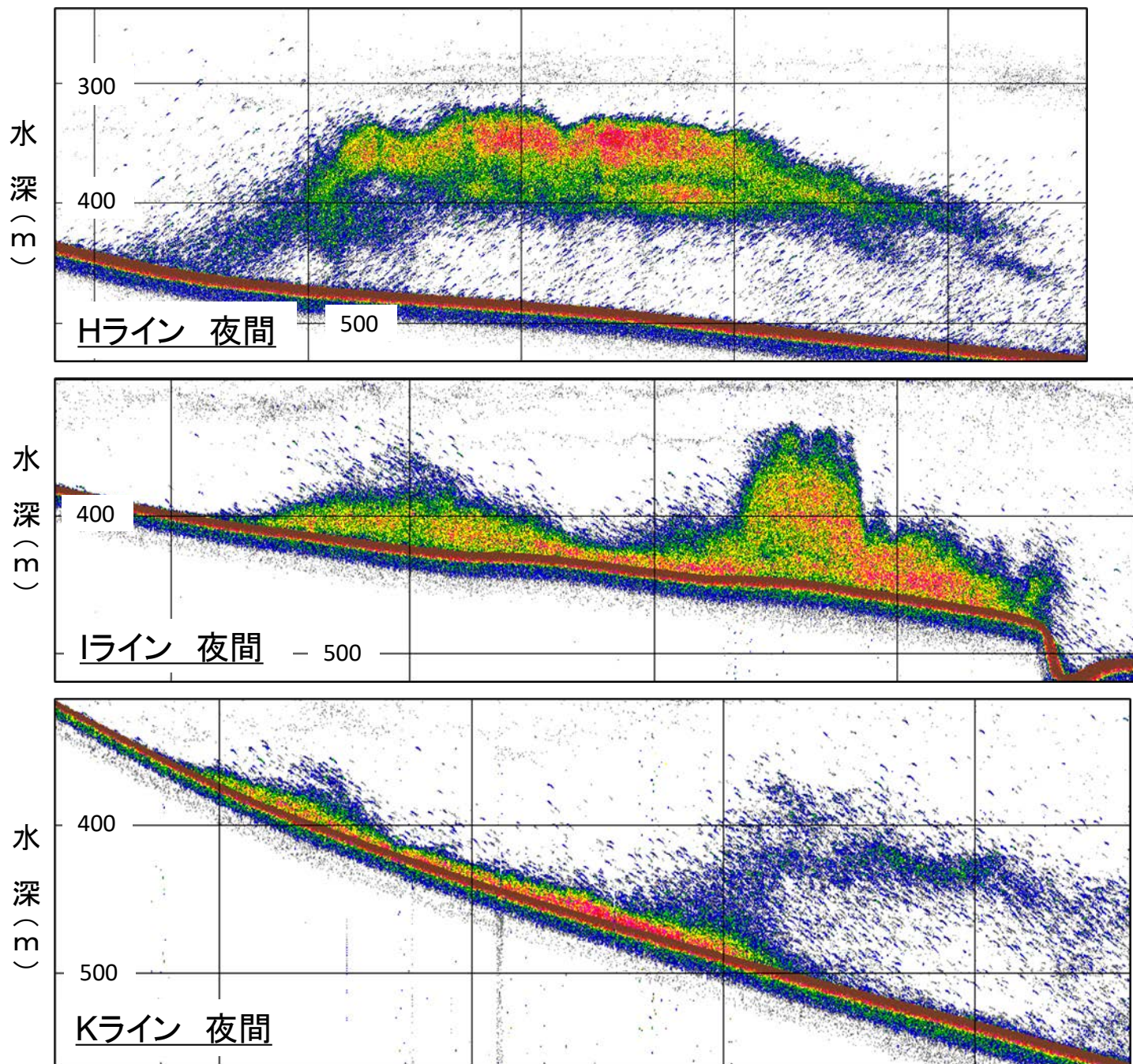


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

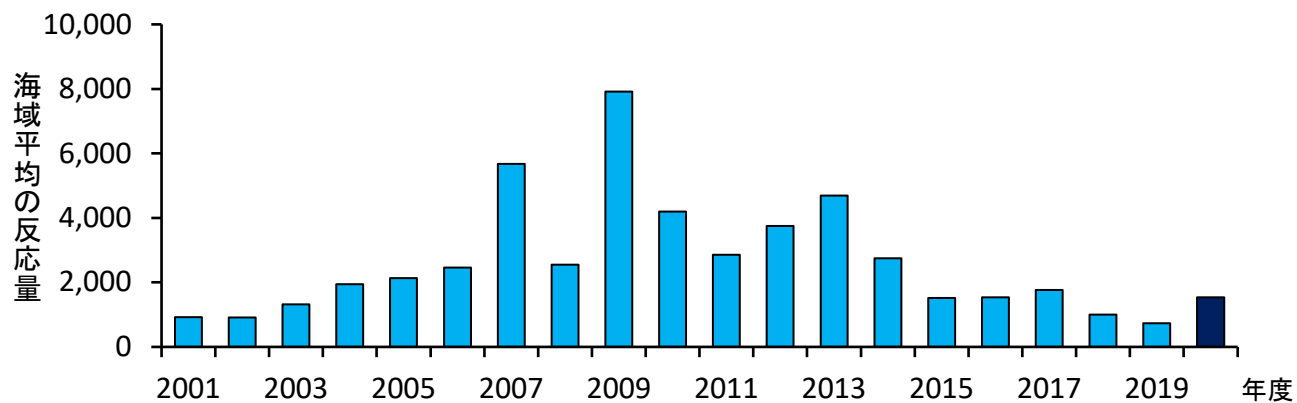


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

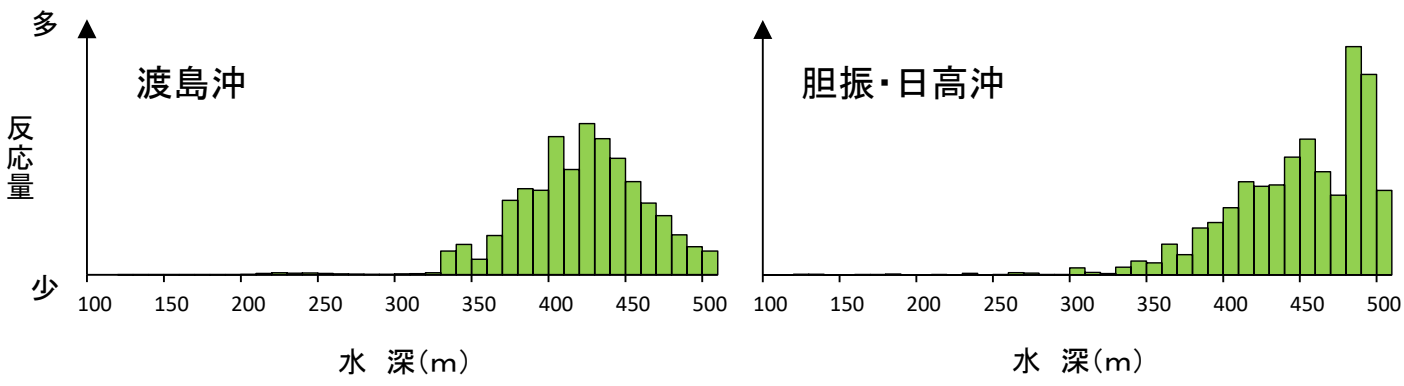


図4 水深別の平均魚探反応量 左:渡島沖(A~Fライン), 右:胆振・日高沖(G~Tライン)

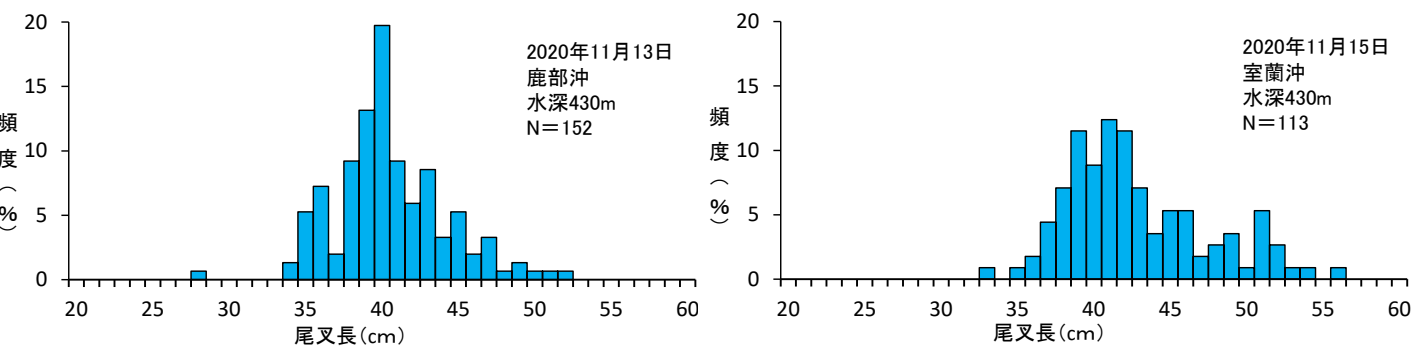


図5 トロールで漁獲されたスケトウダラの体長組成

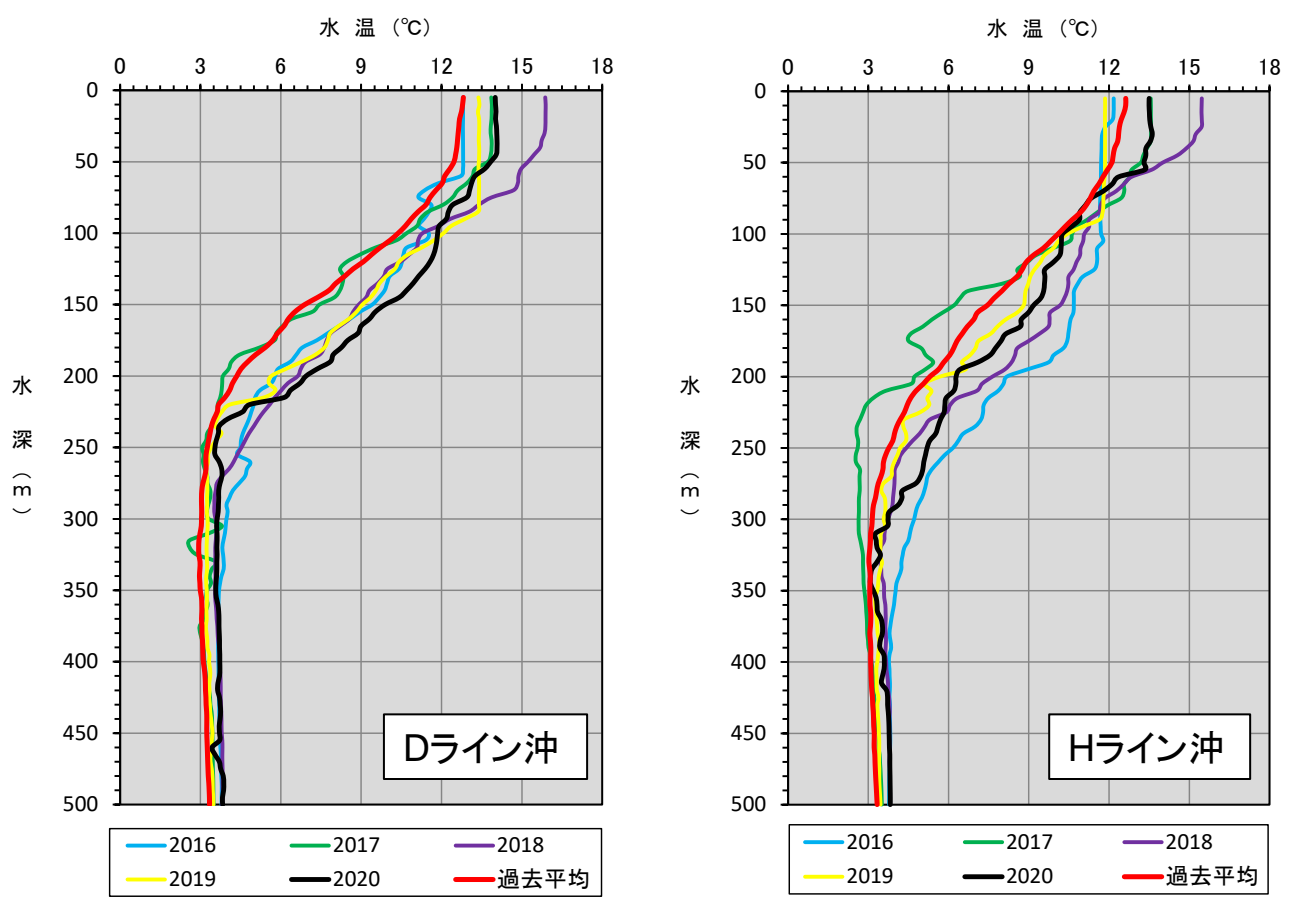


図6 11月中旬における水温の鉛直分布 左:Dライン沖(N42° ライン), 右:Hライン沖(登別沖) (過去平均:本調査における2002~2019年度のそれぞれの調査点の平均値)